vol.06　各種モード・スケールの枠組みについて　～マイナー系～

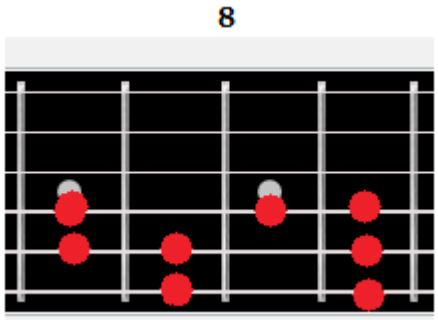
では、vol.06、やっていきましょう。

前回は、メジャー系モード・スケールの構造を確認したので、今回はマイナー系のものを見ていきます。

基本的な概要や考え方自体は、メジャーもマイナーも同じなので、早速、指板上でスケールを見ていきましょう。

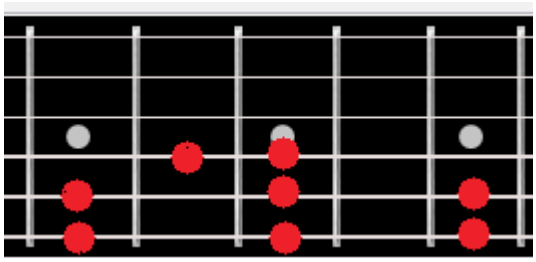
まず最初に確認ですが、メジャー系の基本スケールとして載せたアイオニアンの形はこうでしたね。

※C アイオニアン(メジャー)スケール



これはこれでいいのですが、今回は、マイナー系の基準スケールであるエオリアン(ナチュラルマイナー)スケールと対比させやすくする為に、アイオニアンをこの様に見てみみましょう。

※アイオニアンスケール(3 ノート・パー・ストリング)



これは、『3 ノート・パー・ストリング(1 本弦上で 3 音ずつ音を配置)』の弾き方ですね。

インターバルとしては低い方の弦から、

・tonic、M2nd、M3rd
・P4th、P5th、M6th

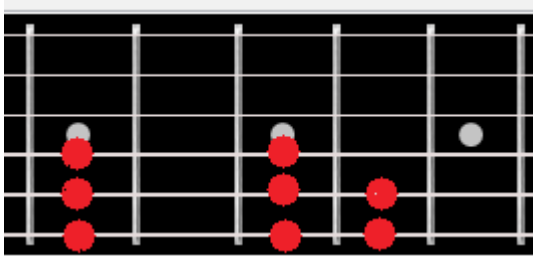
Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

・M7th、tonic(octave)

となっています。

次に、マイナー系の基準スケールである、エオリアン(ナチュラルマイナー)を、1 オクターブのブロックで見てみるとこんな感じです。

※エオリアン(ナチュラルマイナー)



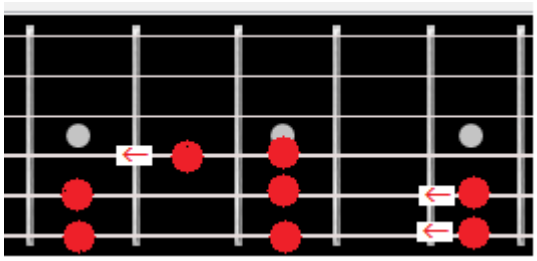
アイオニアンとエオリアンのインターバルを見比べてみると、

・アイオニアン
tonic、M2nd、M3rd、P4th、P5th、M6th、M7th

・エオリアン
tonic、M2nd、m3rd、P4th、P5th、m6th、m7th

となっていて、エオリアンは、アイオニアンから見ると 3、6、7 度が半音低くなっていますね。

これについては、指板上でこの様に見るとわかりやすいでしょう。



ここまでのアイオニアンとエオリアンの違いは、モード奏法に限らず、基本的な音楽の仕組みとしても重要な部分です。

別で配布している教材でも、同じ様な事は解説していますが、キーやダイアトニックコードとも密接に関わってくる所なので、ここで再度、確認しておいて下さい。

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

それでは、以上の事を踏まえた上で、今回の本題に入っていきましょう。

代表的なマイナー系のモード・スケールは、

・エオリアン(ナチュラルマイナー)
・ドリアン
・フリジアン
・ロクリアン(※ロクリアンは単純にマイナー系とは見ない場合もある様です)

の 4 種でしたね。

この内、エオリアンをマイナー系スケールの基準にするので、それと対比させる形で、他の 3 種を見ていきます。

各スケールのインターバルは、

・エオリアン
tonic、M2nd、m3rd、P4th、P5th、m6th、m7th

・ドリアン
tonic、M2nd、m3rd、P4th、P5th、M6th、m7th

・フリジアン
tonic、m2nd、m3rd、P4th、P5th、m6th、m7th

・ロクリアン
tonic、m2nd、m3rd、P4th、dim5th(♭5th)、m6th、m7th

となっていて、赤字がエオリアンとの違いです。

前回のメジャーの時と同じように、全 7 音の内、2 音(こちらは 2&6 度)に違いが出ていますね。(※ロクリアンはとりあえず除外しておいてください)

上記のスケールからこの 2 音を抜くと、それはマイナーペンタになるのですが、この辺りも、メジャー系の時と似た構造になっています。

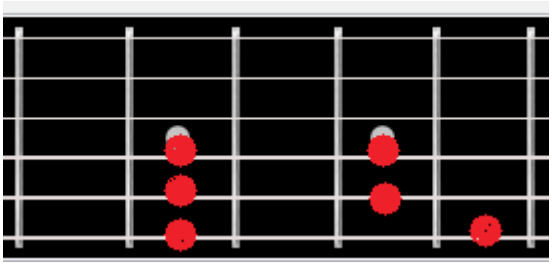
実際は、似た構造、と言うか、リラティブ(平行調)の関係性にある、アイオニアンとエオリアン(メジャーとナチュラルマイナー)は同じ音が抜けているのですが。

例えば、C アイオニアンの 4&7 度は F&B 音、対する A エオリアンの 2&6 度は B&F 音、と言った感じです。

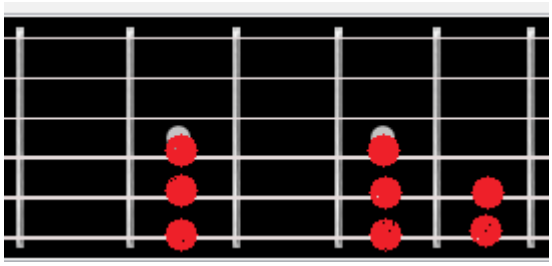
Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

では、それぞれ、1オクターブのブロックで見ていきましょう。

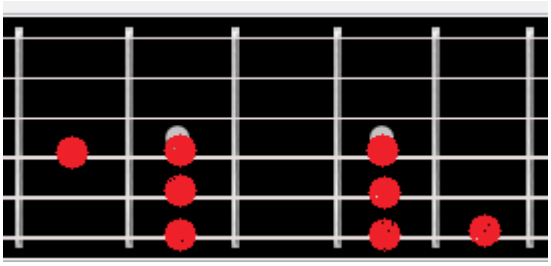
・マイナーペンタ



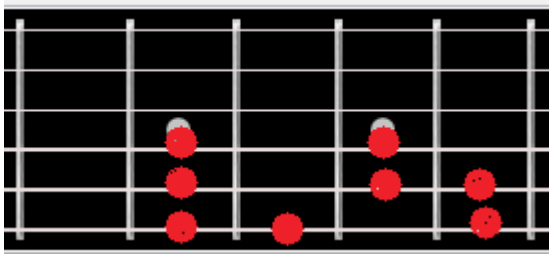
・エオリアン



・ドリアン

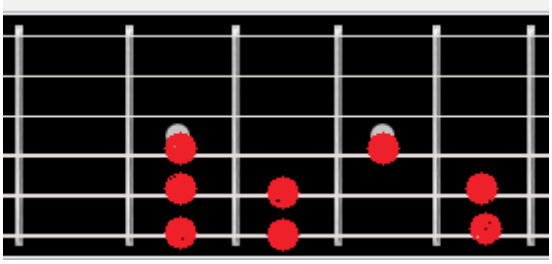


・フリジアン



・ロクリアン

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved



先ほど載せたインターバルの通りに、構成音が変化していますね。

次に、これらのスケールを使う事になる、マイナー系のコードですが、代表的なものとしては、ダイアトニックコードの「Xm7」と「Xm7(♭5)」が存在します。

各コードの構成音のインターバルは、

・Xm7
root(tonic)、m3rd、P5th、m7th

・Xm7(♭5)
root(tonic)、m3rd、♭5th(dim5th)、m7th

となっているので、このインターバルに値する音を“(コード側からの)枠組み”として、素直な理屈で考えると、

・Xm7 上で選択できるモード・スケールは、エオリアン、ドリアン、フリジアン

・Xm7(♭5)上で選択できるモード・スケールは、ロクリアン

になります。
(※Xm7 にはペンタも対応します)

エオリアン、ドリアン、フリジアンの各構成音と、Xm7 のコード・トーンは、同じ度数の音(1、3、5、7 度)が完全に一致しているのでバッティングしませんね。
(※マイナートライアドの『Xm(root、m3rd、P5th)』も同じく一致しています)

Xm7(♭5)に関しては、今回出てきたスケールの中では、♭5th(dim5th)の音がロクリアン以外には合いませんね。(※他のスケールの 5 度は全て P5th)

とは言いつつも、「Xm7(♭5)」と言うコードが、モーダルな意味で、単体で長く鳴っている事はまず無いので、ロクリアンと言うモードを純粋に使う事もほぼ無い、と言ってしまっても良いでしょう。

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

先にも書きましたが、ロクリアンはとりあえず、イレギュラー的に扱うとして、エオリアン、ドリアン、フリジアンに関しては、Xm7 のコード・トーンを“枠組み”とした場合、違いが 2 度と 6 度に現れていますね。

これら 3 種を見る時は、まずはこの 2 つの音に注目すればいいわけです。

さて、前回と今回で、チャーチ・モード 7 種と、そのスケールを使うであろうコードとの関係性を見てきました。

一般的な楽曲を構成する音楽理論(≒コーダルな観点)では、アボイド・ノートとして扱う音も、モーダルな解釈では、特性音(そのモード・スケールを特徴付ける音)として扱う事になります。

アボイド・ノートは、通常の解釈では、コードの響きを阻害する音ですが、モード奏法では、意図的に多用したりもしますね。

この辺り、詳しくは次回以降の、各モード・スケール解説の時にお話ししますので。

では、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved